

《自主研究》

造形表現における描画の環境設定  
—絵を描くことに関心がない、  
不得意であるなどの苦手意識のある幼児への保育者の対応に着目して—

大屋理香\*1

Environmental Settings for Drawing as Art Expression:  
How Childcare Workers Response to  
Children Who are Not Interested in or Not Good at Drawing

Rika OYA

1. 問題の所在

保育現場では幼児が絵を描く「描画表現活動」も大切にされている一つの活動である。そのため、幼児が絵を描きたい時に絵を描くことができる時間や場所、材料などの空間が保障されている。しかし、自由時間だけの保育では、絵を描くことに興味のない幼児は別の遊びを優先し絵を描く機会が少ないまま卒園することもある。また、反対に描くテーマを与えられた活動では絵を描くことに興味のない幼児は周囲と比べ、技量が伴わず苦手意識が芽生えてしまうこともある。保育者は日々の活動の中で幼児の絵を描くことに対してさまざまな配慮をしいているが、苦手のある幼児に対してどのように対応や改善すれば良いのか、悩むことも多い。

金山(1998)<sup>1)</sup>は苦手な幼児の原因として「テーマに捕らわれすぎて描きたいものがない、パターン的な表現しか描けない、評価が気になるなど『幼児の活動の楽しさ』を見失った経験となっていることが多いのである」と指摘し、浜谷(2015)<sup>2)</sup>は「技量が不足して思うようには描けないと感じたり、上手な絵と比較して劣等感を感じたりする等で、大人になるまでに絵を苦手と感じるようになっていく」と早期から絵についての苦手意識を作り出す点と描画発達理論に内在する問題を指摘しているが、絵を描くのが苦手な幼児への保育者の対応については十分に検証されていない。

本研究では、描画表現に興味がなく、苦手意識を持った幼児への対応について保育者にインタビュー調査を実施し、保育者の視点から検証した。絵を描くことに関して苦手意識を持つ幼児を保育者がどのように捉え、対応をしているかということを明らかにし、描画活動での保育者の役割を探ることが本研究の目的である。

2. 方法

1) 調査対象：保育歴5年以上の保育士4名

(1) 保育士A

大学卒業後、海外の幼稚園にて5年間勤務。その後、都内の造形表現が盛んに実施されている保育園にて勤務中。現在、保育歴14年目。幼児期は造形表現が好きであった。

(2) 保育士B

大学卒業後から都内幼稚園にて15年間勤務中。園には専属の造形表現の講師が週1でいる。幼児期は造形表現が苦手であった。

(3) 保育士C

大学卒業後は会社員として勤務した後、都内の幼稚園にて10年間勤務。幼児期は造形表現の楽しさがよく理解していないので得意とは感じていなかった。

(4) 保育士D(私自身である)

大学卒業後、都内の造形表現が盛んに実施されている幼稚園にて7年間勤務。その後、公立保育園、私立保育園、こども園にて勤務。幼児期は造形表現が苦手であった。

2) 調査方法

予め準備した調査項目に従って質問し、調査項目以外の話題についても自由に語ってもらった。インタビューは録音しトランスクリプトを作成し分析を行った。

3) 調査項目

(1) 対象者の属性：勤務歴・所属している園や施設・現在の受け持っている学年

(2) 絵が苦手な幼児に対する項目：(i) 幼児が絵を描くことに対してどのようなことを大切にしているか。(ii) 具体的にどのようなことを保育時間にしているか。(iii) 幼児へ画材をどのように提供しているか。(iv) どのような姿が絵を描くのが苦手と考えるか。(v) 絵を描くのが

\*1 東京家政大学(Tokyo Kasei University)

苦手な幼児へどのような対応をしているか。(vi) 対応をして変化があったか。(vii) 自分自身の幼児期、絵を描くのが好きだったか。(viii) その理由や原因はあるのか。

#### 4) 倫理的配慮

調査参加者に対しては研究の目的・方法・個人情報の取り扱いと不参加、参加後の辞退により不利益を被ることはない旨を説明した。同意の上で参加していただいた回答のみを分析対象とした。

### 3. インタビュー結果

#### 1) 描画表現での保育者の意図

「何を大切に描画表現の保育をしているか」保育者の意図をインタビュー調査した。

保育者 A は「絵を描くことはインプットしたものをアウトプットするものでもあり、コミュニケーションのツールでもある。日頃感じていることを表現しているのではないか。言葉で聞きがちな部分もあるが絵で表現することで何に興味があり、何を面白いと感じているのかが理解できる」と述べていた。

保育者 B は小学校受験をする幼児が多い地域に勤務をしていることから「顔は丸で目も丸などのお受験のような描き方をするのではなく、その子が感じていることを自由に表現できる活動にしている。」と述べていた。

保育者 C は「自分自身が絵を描くのが苦手なので、苦手だという認識をもたせないような活動を心がけている」と述べていた。

私自身は、幼児の描画活動では完成品よりも作成過程を楽しむことを第一にしてきた。

#### 2) 絵を描くことに苦手や興味のない幼児への対応

次に「絵を描くことに苦手や興味のない幼児がいると思うか、それはどのような姿であり、対応を保育中にしているか」保育者の対応をインタビュー調査した。

保育者 A は「絵を描くことに戸惑う姿があれば、その幼児は近くの他児の絵を真似して描くことや子ども同士の関わりで絵に興味になかった幼児が絵に興味を持ち、絵を描く姿がある。他の興味や関心があるもので自信がついているために基本的に言われている苦手意識のある「絵を手で隠す」「筆圧が弱い」「なかなか描き出さない」という姿がない。また一時期は、均等に同じ遊びや描画表現の機会を設けた方が良かったと思っていたが、同じようなことをさせなくても、それぞれが興味を持っている遊びで身につけている力がある。そのため、絵を描かない幼児がいても特に対応をする意識はしていない。」と述べていた。

保育者 B は「絵を描かない幼児に対して機会をつくり、

描きたいことがあるのに描けなくて困っているようなら少し言葉がけをすることはあるが、自分が絵を描くことが苦手だったので気持ちが理解できるので無理強いはさせないようにしている。」と述べていた。

保育者 C は「自分が得意と思っていないので、苦手意識（得意ではない）を先に感じて欲しくないと思って指導をしている。苦手意識の子がいるというよりも、最初から苦手意識を持たせないように手をうっている。フォームが描けている、描けていない、絵の上手、下手という意識にさせないようにしていた。それが「絵を描く」という意味にさせないようにしていた。感じたことをちょっとでも表現できたらいいという認識にしていた。また、何か絵を描く際に紙とクレヨンのみではなく、画材を組み合わせるような対応にした。」と述べていた。

私自身は、絵を描くことが苦手な幼児に対して、その子が興味を示すような画材や道具を用意したりした。また、興味のある遊びと繋がる楽しい活動だと感じられるようにしていた。

### 4. 考 察

インタビュー調査の結果、幼児が感じたことを表現ができるような活動や空間を大切にしていることは共通していた。

浜谷 (2015)<sup>2)</sup> が「絵を描く過程の楽しさに焦点を当てる以上に、結果としての絵に焦点化して評価する傾向がある」と述べるように、重要なのは評価を意識させることではなく、幼児にとって描画表現が楽しいと思えるような活動や空間づくりである。

それぞれの保育者には、どのような点を重視するかという問題意識には相違がみられた。所属している園の保育方針による違いも考えられるが、インタビュー調査を続ける中で、保育者自身の幼児期の体験というものが関係しているように思われた。保育者 A は絵を描くことが好きであったが一方、保育者 B は苦手であると言っている。保育者 C は好きだったが、上手く描けないために苦手意識はあったと語っていた。私自身は絵を描くことが大変苦手であった。

このように幼児期に絵を描くのが不得意だと感じている保育者は苦手な経験があるために、絵を描くことが苦手な幼児への対応をより積極的にしていることが示唆された。

本研究では3名の保育者しか聞くことができなかったが、今後はより多くの保育者にインタビュー調査を実施し、特に保育者自身の幼児期の経験や描画表現への意識が保育者になってからの幼児理解や保育の方法にどのように結びついているのかということを明らかにしたい。

引用文献

- 1) 金山和彦：保育における技法遊びについて—保育実践現場への質問紙調査をもとに—, 美術教育, 277, 55-59 (1998)
- 2) 浜谷直人：描画発達理論を拡張する：子どもの絵の苦手意識と保育実践の関係, 心理科学, 第36巻, 第1号, 1-9 (2015)